

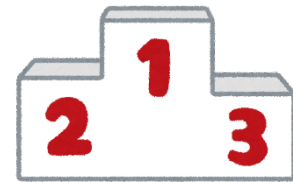
## 新刊ビブリオバトル投票を通して感じた3つの「ナットク」

第6G 富藤賢治

一つの書籍をここまで広げ、深め、味わうことができるのかという体験をし、その深さ、面白さを8月以降、何度も体験させていただきました。そして、今、ビブリオバトル総括を拝読し、感じたことを3つにまとめます。題して、**新刊ビブリオバトル投票を通して感じた3つの「ナットク」**です。

### (1) ナットクその1 やるとわかるおもしろさ

「5つから3つに選ぶこと」それはとても難しいものでした。最初に中嶋先生から送られていた5つの作品を読み、そのレベルの高さに驚きました。内容はもちろん、発想力、言葉えらび、文構成、挿絵やレイアウトなど、もうどれをとってもすでに完成されているものに順位はつけられない、ましてや3つに絞りたくないし、絞れないだろうというのが正直な気持ちでした。そして、なぜ3つ？1つだけ選ぶのではダメなのか？などいろいろと考えながら、とにかく読み進めました。それはどの作品も本当に面白く、読者である私自身は夢中になっていたからです。正直なところ、気がつけば、何度も、何度も読んでいました。



そうしているうちに、実は、数も順位もさほど問題でないのかもしれない、これは中嶋先生から私たちに、ボールが投げられてこられているのでは！と思ったのです。そして、そのボールをどう打ち返そうかという考えが頭の中にかんできました。

例えば、ディベートなら、便宜上、賛成派と反対派に分かれて、それぞれの立場で議論をします。勝ち負けを決めはするものの、その目的は、多面的な見方・考え方を身につけることです。今回のビブリオバトルもそうです。5つの作品を3つに絞るといことで順位を決めていくものの、選ぶ作業を通して自分自身の「作品を見る目」はどんなものなのか、他の先生方が選ばれるものと自分が選ぶものと照らし合わせた時、どんなズレがあるだろうか、あの先生と自分は同じ考えなのか、それとも全く違うのかなど、何か楽しそうな活動ではないのかと。

難しいと思っていた5つから3つに絞り込むことは、むしろ自らを試す絶好の機会であるというリフレーミングが自分の中で起こり、知的でワクワクするゲームに変わったのです。すると、こんな楽しいことは、やらねば損だという気持ちになっていたのです。

### (2) ナットクその2 順位の向こう側にあるものを見つける

かつて自分が行っていた授業を頭の中に浮かべました。それは、あるトピック(例:世界のお祭り)について調べたことを各班がプレゼンテーションをして、評価用紙にどれがよかったかを相互に記

入させて集計し、クラスの中で一番よかったものを選ぶというものです。評価用紙には、「声の大きさ」「内容」「伝わりやすさ」「資料の工夫」という観点で A から C を、そしてよいと思うプレゼンテーションを5つ選び、その理由を書きなさいというものでした。



だいたい「声が大きくてよかった」「わかりやすかった」「模造紙が見やすく、〇〇さんがおもしろかった」などというコメントがほとんどでした。そこに教師の評価も加えて結果を出していました。最初は皆、楽しくとりこんでいたのですが、それだけです。それ以上は何も残らない……。

### なぜか？

それは、順位を決める事、そしてその中で選ばれることが目標になっていたから、そして生徒たちの、好ききらい、雰囲気、その場のノリといったそれぞれの主観によって左右されるという授業設計になっていたからです。今回のビブリオバトル本選のように、「お互いの作品を何度も見直すことで、よいところ、修正すべきところを洗い出し、さらに作り直して共有しながら高め合うことを通して、本物を見出す目を養う」といった学びになっていませんでした。今は、それがわかります。

中嶋先生から送っていただいた総括の冒頭には、今回の本選の「ねらい」の一つとして、**順位を決めること自体に意味があるわけなく、自らの「評価観」が適切かどうかを見極めること**とありました。順位をつけること、一つに決める事等、便宜上行っている(「～であるべき」行動)ことに対して、なぜそうなるのか、そうしようとする根拠、理由は何かを皆で考え、協働して納得解を生み出すことのほうが、子どもたちにとって、はるかに大事な力であるにも関わらず、当時の私にはそのような目をもっていませんでした。

**「論点を整理し、根拠を持って客観的な指標をもって物事を判断するという習慣」**を、教師自身は持っておく必要があります。そして、子どもたちもこの視点を身につけられるように授業デザインをしていくことが大事であったわけです。全く持って恥ずかしい限りです。

今回、中嶋先生から送っていただいた「地球市民オンライン塾」生、「中嶋塾@東京」塾生の方のコメントの中から 5 つの作品で選ばれたものをそれぞれ数えてみたところ、見事なくらいに No.1 から No.5 ほぼ同じ票数になっていました。もはや順位をつけることが目的ではなく、そこへ向かって考えていく課程に意味があったということがわかりました。中嶋先生が書かれていたように、**主観は相手への「説得」となる一方で、客観は相手への「納得」を生み出すという原理原則**を知った上で単に順位を決めるというだけでなく、自分の根拠(論拠)を振り返って示すことができることの大切さを再認識した次第です。

### (3) ナットクその3 これこそ知的でワクワクするゲーム

いよいよ、アドバイザーの先生方、オンライン塾の他グループの先生方、中嶋塾@東京 2023 受講の先生方が選ばれたものと自分自身が選んだものを照らし合わせてみました。単に問題集で正解を答え合わせしているというよりも、こんな見方やとらえ方があるのかということ、この部分は自分と同じであるがここは違っている等、様々な違いがわかりました。なぜ、そのように感じられたのかを紐解いていく過程は、単に答えが正解であったからうれしかった、というよりもはるかに楽しいものであり、それは「知的な答え合わせ」といえるものでした。



一冊の書籍をこれほどまでに深く、何度も繰り返し読み、その書評を書いてさらに相手のために推敲し、根拠を持ってよいものを選ぶという活動、そして協働して皆で取り組むことで、それぞれの作品がどんどん洗練されていくプロセスは、何よりも、やればやるほど力がついていくという感覚が持てました。

また、中嶋塾@東京 2023 を受講されている先生方は、何度も相互に推敲しあっておられる中で、さらに洗練された文章にするために、書いた文章を音読するということを通して、リズム、語感、文の流れ方を見直し、より伝わることばを選んでおられたと伺いました。中嶋先生がおっしゃるように、今回、推敲やビブリオバトルを通して、文章を読み、書く上で声に出して読むことで、紙の上に書かれて平面だった文章に命が宿るように目の前に現れました。そして心地よさを感じたり、または違和感を覚えたりすることもあり、何度も書き直して考えてみました。

**「結局、子どもらは、この先生なら力をつけてくれると思えば、自然とついてくるもんね」**

かつて同僚が言っていた言葉を思い出しました。まさにそれがこのビブリオバトルでした。だからこそ続けることができたし、仲間とともに熱中することができたのです。そんな授業や研修をこれからすすめていくことこそが今の私たちの使命です。

### (4) おわりに

ビブリオバトル自体は、さまざまな事例もあり、国語科の授業でも実践されている場面を見学させていただいたことはありました。しかし、これほどまでに、読んで、書いて、考えて、なおかつ、お互いが伸びあっているという活動は初めてでした。

最初は、5つの作品に順位をつけることは難しいと思いつつ、中嶋先生のねらいはさらに違うところにあるはずという予想をしながら、いざ取り組んでいくと、今回の課題も決して楽なものではありませんでした。ただ楽でなくとも、しっかりと取り組むことで自分も仲間も力をつけていくことができるということがわかっていると、それはとても楽しい「本物の学び」でした。

投げていただいたボールを芯でとらえて打ち返すというところまではまだ至っていません。しかし、見逃したり、空振りしたりすることを恐れずにこれからも学んでまいります。それは**「聞いているだけ（参加するだけ）ではなく、発信してこそその人生」**だからです。今回も、大きな学びの機会を与えていただきましてまことにありがとうございました。